

家庭科の男女共修をすすめる会

※発行日 74. 10. 25

※連絡先

東京都渋谷区代々木2-21-11

一部 50円

婦選会館内

TEL 03-370-0238

第四回『家庭科の男女共修をすすめる会』集会報告

テ ー マ

「男女には特性があるか。特性があるとする
れば、教育は、それにどういにかかわりを持つ
か」

日時 九月二八日PM一・三〇～四・三〇

場所 婦選会館

講師 平井信義氏（大妻女子大学 児童精

神医学）

原ひろ子氏（文化人類学）

「家庭科の男女共修をすすめる会」では、

第二回・第三回集会において、男女共修を実
践した方の報告を聞き、教育内容について検
討してきた。一方、東京都の中学・高校の家
庭科教師、都道府県・特別市の家庭科指導主

◎ 第四回『家庭科の男女共修をすゝ
める会』集会報告

△テーマ 男女には特性があるか……(1)

◎ アンケートから……(5)

◎ 教課審委員

渡辺茂さん、原田穠さんを訪ねて……(6)

◎ 投稿
かすみを食べて男は生きられるか

和田 好子……(6)

◎ 家教連夏期集会でアピール……(8)

◎ これからの運動についてのお願い……(8)

◎ 日誌メモ……(10)

事、及びこの運動の賛同者に対してアンケ
ーも行った。また、教育課程審議会委員、文
部省・東京都教育委員会の係官なども訪問し
て話し合いを続けてきた。

こうして、広く各方面の関係者の意見を聞
く中で、会の趣旨に対する賛否は、常に「男
女の特性についてどう考えるか」が論の分か
れ目になっている、ととらえた。そこで、み
だしのテーマを掲げて、学者のご意見をうか
がい、基本的な命題を掘り下げようというこ
とで二氏をお招きして集会を持った。

まず、前号ニュースに記した以後の会の活
動についての報告があった。母親大会や、全
国PTA連合会大会におけるピラミッド署名
活動、教育課程審議会委員、渡辺茂氏・原田

磯氏訪問などである（六頁参照）。そのあと、原ひろ子・平井信義両氏が次のように語られた。

原 「人類は、動物として持っている可能性と限界を、文化によって拡張したり、狭めたりしてきているが、どのような社会にも共通しているのは、近親相姦のタブー、家族という形態、男女の役割区分である。そして、現実には、男女の役割が違っているとらえて、異なる役割を課している社会がほとんどである。

私が調査したヘーインディアンについては、いけば、『近親相姦』については非常に厳しいタブーを持つが、『家族』についてはたいへんルーズであり、『男女の役割』については、出産・授乳のほかはほとんど分けずに、男女がどうにでも入れかえて暮らしている。だが、これはむしろ例外であって、ヘーインディアンは生活と男女の役割のあり方は、人間の可能性の多様な幅を私たちに教えてくれるが、そこで生きている男女が、生物として無理をしているかもしれないことに注意する必要がある。文化人類学の資料から男女の特性を明らかにすることは難しいが、ある社会が男女にどういう役割を期待しているか、というデータはある。ペーコンの調査（一九

五七年）によれば、左表のとおりで、男の子への期待と、女の子への期待とが、くっきり色分けできる。ただし、この表は、社会の文化が何を期待するかによって、男女の役割が生まれる。ということもいえるし、このデータを頼りに、男女の役割は異なると主張することもできよう。

期待の役割

	調査された社会	女の子の期待	男の子の期待	どちらの期待
庇護性	33	82%	0%	18%
従順さ	69	35	3	62
責任感	84	61	11	28
成就	31	3	87	10
自立心	82	0	85	15

別の調査によれば、父親の役割・母親の役割を分化させて考えている社会は、56のうち46あった。また母親の役割は、どの社会にもほとんど共通であったが、父親の役割については千差万別であった。

マーガレット・ミードは、女権拡張運動の盛り上りの中で成長したが、彼女は、文化が男女の差をより強く色づけていると唱えた。女は、母性であることによって、生物学的に存在理由を確認しやすい。これは人類普遍の現象である。男は、生物学的に自己確認の方法がないから、文化の世界を自分の中に持ちこんで「男の世界」とした。そこに女が入っていかうとすれば、当然シャットアウトしようとするのだとも言っている。『父なき社会』ということが問題になっているが、ミードによって提出されたものは、文化人類学の立場でまだ論証できずに、残されたままである。

この運動には、私も賛同している一人だが、男女の役割逆転が可能だとしても、それが生物としての人間に無理を生じさせないか、という点に注意を払わなければならないと思う。平井 「私は封建的な家庭で育ち、結婚後は父のあり方を受けついで暮らしていた。しかし、昭和二八年のWHOのセミナーに参加して、目を開かされた。以後、男の行動様式・女の行動様式に興味を覚えるようになり、性差研究を二年間にわたって行ったこともある。そして、日本では、封建社会の意識が、

いままお日常の暮らしの中の夫婦の姿や子供のしつけに出てきていることがわかった。

唐沢富太郎氏は「ハタタコ コマ」「ハナハト マメ」「サイタ サイタ サクラ」が「サイタ」のどの教科書で育ったかによって、いざという時に出るホネが違うと言っている。名士録に載っている人の六割以上が「ハタタコ コマ」で学んでいるが、これらの人はタテ社会を重んずる考え方を持っている。前の時代の意識がどういふところに残っているかを、まず整理してみることが必要であろう。

医学では、半陰陽の研究があるが、育てられた性によって、男女のパーソナリティが育つと言っている。男女の違いは、生物学的には妊娠・出産ができるか否かであって、育児は男性にもできる。私は、七年間乳児院で子供を育てたが、この体験により男は剛毅であれ、と育てられた私のパーソナリティが変わった。『子供の仕事をしている男性は女らしい』と評されたこともある。しかし、小児科の医者として、また自閉症児に取り組む中で『やさしさ』とは女性の専売特許ではなくして、男女を問わず人格として大切なものだと思った。一方、私が接する育児ノイロー

ゼの母親には自己決定の力が欠けていることが多い。やさしさも決断力も男女を問わず大切である。パーソナリティ形式の上で男女を分けることはいらない。少なくとも、思春期以前の子供に差別するような教育をしてはならない。

思春期以後は、男女で、声・身体つきなどボディイメージが違い、体力が違ってくる。筋力の必要な仕事は男性に回る一方、特に妊娠後期の女性は、庇護されなければならないという男女の違いは生ずるだろう。しかしこういう生物学的な違いよりも、どういふ社会が男女の価値のあり方をきめるかを考える必要がある。

私は、昭和三四、五年ごろ、家庭一般男女必修四単位説を出して、家庭を大切にすると男性・女性を育てる必要を唱えた。親になるには国家試験をしてほしい、というのも二〇年来の主張である。ある年令層において、子供の問題を学ぶことはきわめて大切で、育児技術はむしろ二の次である。従来の裁縫・家事の範囲を固執する限り、男にも必要とはいえないが、『家庭』そのものについて考えさせることが大切である。

この後、討論に入った。学生ふりの若い女

性がまっ先に立って質問した。

。「男女の肉体的差異が精神的差異につながるのか」

平井「肉体的差異は、思春期に性ホルモンが働きはじめることによって生ずる。しかし、性ホルモンが男女のパーソナリティまで決めるかと考えるのは、まったくナンセンスである」。「現実の資本主義体制下の社会では、家庭科を男女共修にしてもどうにもならないのではないか」

原「私が男女共修に賛成するのは、まさに現実の社会なるがゆえにである。一昔前の家庭は家族数も多く、家庭の仕事も入れ替わって分担できた。しかし、核家族の現在、夫と妻の役割を固定してしまつたら、妻が出産や病気で入院すると、夫はお手上げである。男女ともに相手の仕事を分担しう力をつけなければならぬ」

平井「未来をどう作っていくか、という観点から考えなければならぬ。それには、男の子に、もっと家庭の仕組みについて多角的に思考させる必要がある。古い考えが幅を利かせて始めている現在、また以前のタテ社会にもどってしまいそうなる危険をはらんでいる」

さらに、日本女子大の広田寿子氏が

「資本主義体制の社会がもう絶対に変わらないもの」とらえての意見のように思う。いま私は、川崎市で、百人の乳児を持つ労働者の調査をしているが、男女ともに主体的な生き方を模索しており、男女の役割意識が動いていることを主観として受けとめている。社会は動いているということを捕えねばならないと思う」と述べられた。

母親勉強会を主宰している島田美恵子氏

「数年前、食品添加物のことで厚生省の係官に注文をつけたことがある。女がやましく反対するから規制するという考え方でなく男も家庭で有害食品を食べていることを忘れないでほしい。男は作り、もうけ、公害をまき散らし、女はその後始末という役割分担はもう止めてほしい。男性が、もっと倫理的に社会づくりを考えることができるように、必修の家庭科を実現したいと願う」

ここで「文化のバターン」の多様性に応じて、男女の役割期待も多様化している。男女共学は、戦後教育の理念だが、男のラインに女をのせようという発想が多い。女子の独自性を伸ばすことも、教育の平等といえるのではないか」という意見が若い女性から出、中年の女性がすぐそれに反対した。また原ひろ子氏

も「男女の役割分担は、各家庭で決定すればよい、とよく言われるが、その決断力をどこで学ぶのか、女性の悩みは、多様な生き方の可能性の中で、自己決定できないためであることが多い。子供を叱る際のことを調査すると、母親が「男のくせに」「女のくせに」ということを最も多く用いている。こういう現実から、やはり教育の必要性を痛感する」と述べられた。

「男女共修の家庭科といっても、具体的なイメージがなければ考えようがない」という意見に対しては、遠路はるばる参加された大阪教育大宮川満氏が、関西における「家庭科を考える会」の取り組みを紹介され「この会の当初から、私は、運動と教育内容の研究とが車の輪のように進められなければならない、という意見を出してきた。現在の家庭科教育を克服するために、『考える会』では、家庭生活認識（事実認識・価値認識・認識行動）について、子供から青年までを調査し、小・中・高一貫性を持った家庭科教育をつくり上げるべく、必要な教育内容の研究を重ねてきている」と発言された。

さらに、「特性論を今日取り上げた根拠は、男女が持つ生物学的な違いを、教育における

差別に利用している文部行政を問うところにあるのだが」という発起人の一人からの発言に対して、平井氏は「タテ社会の名残りが現在もなお存在するのを、教育によって改めていくことこそ必要である。男女の特性に応じた教育ということは、学問的には何の根拠もない。会としては、観念論ではなく、具体的な事例を一つずつ挙げながら取り組む必要がある」と述べられた。

家政学部で学んでいる学生から「この会のあることを黒板に書いておいたら、家政学原論の教授が、きわめて若々しい反応を示された」との発言もあり、家政学部や、家庭科教師養成の立場にある人々の中に多くの問題のあることが浮き彫りにされた。

今後の運動のすすめ方について、発起人より提案があり（頁参照）次回のテーマについてもはかった。「働く女性や男性から、どんな家庭科を望んでいるか、希望なり、具体的な提案を寄せてもらってはどうか」という意見も出され、毎回熱心に出席している男性から「中年以上の男性の参加を大いに働きかけようではないか」の声も挙げられた。

希望と抱負にあふれていてもよいはずの若い女性からの問いかけが暗く、厚い壁の圍繞

する中で懐疑的にならざるを得ない現実を痛く感じた。（半田）

× × ×

……アンケートから……

……ご意見・賛同理由など……

◇ 小学校のとき、男女ともに料理など、まあワイワイガヤガヤと楽しくやった。中学の時、私もトンカチをもって工作めいたものを作りたいなあと思つてみつつ、ブラウスなどぬった。目が不揃とかボタンつけがちがうとかいわれながら、高校の時、女子達が手にサイホウ道具などもって薄暗いろうかに並んでいた。とき、男の子は校庭でサッカーをぞしていた。高校の時のイメージは、なにかとても暗くて、女の子だけが集まって秘密めいている様な、教室がうす暗かったせいかもしれないが――。

大学になって、やっと言葉になった。おれはおかしいと。大体、人間形成とやらには学校の占める位置はかなり大きく、そこで、男・女・の特性とか、女らしさ、男らしさとか能力や、観念まで押しつけることは絶対にイヤ。男女の特性ではなく、人間の、個人の特性を

いかして、生きていけるための一つの土台として、いろいろな、技術を教育という形で行うならば、それも又一つとは思います。（家庭科の前提がよくとらえられないので会に賛成も不賛成もしないOさん）

◇ 家庭科は、家庭とは何か、生活とはどういうことかを考え、自立した生活力をつちかう人間の基礎学科として、女にとっても男にとっても大事な教科であるからです。（Kさん）

◇ 家庭は、男・女が共同で創るものであるという、かんたんですが、真実から賛同いたします。（Iさん）

◇ 人間の教育は家庭科を男女共に学ぶことからにはじまると思います。（Sさん）

◇ この運動が中広い層の方達の支持も得て出たことは大変よいことだと思えます。単なる高校家庭科の問題として女教師がキリキリ舞いしても方向はひらけないと思えます。中広い職業人、男性の方達の意見も心をひろくして聞き入れ大げさにいえば国民的課題として考えられるまでに発展させたいものだと思います。（Oさん）

◇ 生活を明るく豊かにする人をねらう時に、生活感情はずいぶんことなると考えます。生徒全員で考えたことを個々の男子に各生徒がもって行って話して意見をもとめたところ、男子が自分の家庭をみる眼が、自分たち女生徒と異質なことを多くの子が感じてきました。男女一緒の場について考えさせ、実行させてみれば、自分たちの中にある同じ願いを具現する手だてを考え協働の姿がさらに深まるのではないかと考えました。（Hさん）

◇ 男女の特性を教育の制度・内容に直結させ、固定化するのはあやまり。男女差別の思想をなくしていくために不可欠の条件。生活の充実向上をはかるためには、男女の科学的認識と実践力が必要。（Mさん）

◇ 現在、ワイホーム・イデオロギーの下に、男は仕事、女は家庭の夫婦分業家庭が外側から枠づけられています。現実の家庭では、主婦労働者の増加によって、夫婦の分業は崩れつつあります。これから新しい家庭観を、

われわれ自身の手によって、創造してゆく
ためには、男女によらず経済的ないし、生
活者としての自立が必要だと思ひます。

現在の女子のみの家庭科は、経済的に自立出
来ない女性と、生活者として自立出来ない男
性を再生産しています。(Fさん)

教課審委員

渡辺茂さん、原田穠さんを訪ねて

発起人代表は、九月には、教育課程審議会
の中でも特に中学の技術・家庭科に関係が深
い、東大教授渡辺茂さんと、西戸山中学校長
原田穠さんをお訪ねしました。

渡辺さんは、基礎的な生活技術を含めた「
安全のための教育」を強く主張され、平等と
いうことにも強い関心をお持ちで、私たちの
考え方ともかなり通ずるところがあるように
思ひましたが、現実の教育課程改定の問題と
なると、「今すぐ全面的な共修はむずかしい
から、部分的に共修をすすめることにして、
どこから始めたらよいか具体案を出してはど
うか」というご意見でした。

「現場の実態を伝えたい」と原田さんはお
っしゃいましたが、これまで話し合いを続け
て来た感じでは、家庭科の問題に限らず、現
場の先生や、父母や生徒の頭を、どれだけ
委員の皆さんが感じとってくださるのか、心
もとない思いを禁じ得ないのです。

原田さんは、「今の子どもたちは自分で物
を工夫してつくったり、体を動かして働くこ
とがたりないし、家庭の意味、役割について
の認識が強くなっていて現状を考えれば、技

術・家庭科は重要だ」としながらも、「共修
の趣旨はもっともだが、時間数を減らそうと
している今、充実した内容の共修をすすめる
ことはむずかしい」というご意見で、男女い
っしょの実習などには、やゝ抵抗感もあり
のようでした。

(文責・梶谷)

☆ ☆ ☆

投稿

カスミを食べて

男は生きられるか

和田 好子

ある学校に、「タヌライス」というあだ名
の、若い男の先生がいた。まだ独身なので、
すすんで同僚の肩がわりをするのか、しょっ
中宿直をしていた。彼は近所のそば屋で出す
タヌライスというものが大好きで、いつもそ
れをとって食べ、他のものは食べなかった。
タヌライスとは、タヌキうどんに一杯のどは
んをそえたものである。小学校のことだから
屋は給食を食べていたはずだけれど、朝はど
うしていたのだろうか。一年ほどして、彼は
健康を害し、休職してしまつた。病気になる
原因は、栄養失調だったという。

私の知り合いの家庭では、もっと悲しい事
件がおこつた。その息子はひとりっ子で、
一流の大学を出、一流の会社へ入つた。しは
らくしてヨーロッパへ駐在を命じられたが、

母親は彼と別れなくなくて、やめて欲しがつ
た。しかし父親は、男が一人前になつて、母
親と別れられないようではよろしくない、行
け行け、とすすめ、息子は父親の意見に従つ
て日本を去つたのである。

それから二年後、息子はヨーロッパで急死
してしまつた。両親は空港で別れて以来、ふ
た目と彼を見ることができなかつた。彼の死
因は、栄養失調と、酒や睡眠薬の飲み過ぎで
あつたという。

このかわいそうな青年も、タヌライス先生
も、人間が何と何を食べていたら、健康に生
きていけるかを知らなかつたのだと思う。

男の、生活に対する無知は、みずからを傷
つけるだけではない。

私の手もとに、津村政行著、「回天と日本
海軍」という本がある。津村氏は元海軍少佐
で、太平洋戦争における作戦の失敗が、多く
の犠牲を生んだのを痛感して、これを書いた
のである。

この本によると、当時、海軍の人事はハ
ンモック、ナンバーといつて、兵学校の成績順
位がよいものから出世していくしくみであつ
たので、軍令部や海軍省に入つて最高の指揮
をとるものは、いわゆる点取虫に限られる。

この点取虫達は、戦略・戦術の理論はよく暗
誦していたが、じつさいの戦争では、おどろ
くほど非常識なことをやつた。たとえば潜水
艦は、必ずある形にきちんと並んで航行しな
ければならぬとし、米軍にそれを見抜かれて、
一度みつかるると手ずる式に撃沈されてしまつ
ても、その配置を改めようとしなかつた。ま
た大軍を太平洋中の島にばらまいておいて、
食糧・弾薬の補給をたいせつに考えなかつた
ので、戦争で死んだものよりは、が死したも
ののほうがはるかに多いという結果をまねい
た。

日本の男は高尚すぎ、人間が食べなければ
生きていけないということを知らなかつたの
ではあるまいか？ それに比べてアメリカの
男は、皿洗いや買ひものを手伝うのが常だか
ら、戦争となれば大補給作戦を展開して、食
べものから衣服から、現実に必要なものは何
でも持つていくという智慧があつたのではな
からうか？

男だつてカスミを食べては生きられないの
だ。男にも生活の常識はほんとうに必要だと
思う。

(全P研会員)

来信

前略

「家庭科の男女共修をすすめる会」を
「女・エロス」で知りました。

以前から家庭科教育に関して少なから
ず関心がありました。「女はこうあるべ
き」と社会的規定をつくりあげるものと
して、女子のみ必修の家庭科に短的に表
われていると思います。

現在、私は大学生ですが、中学
・高校時代女子のみの家庭科というもの
を甘んじて受けてきました。そんな私で
すが大学に入って目醒めた(?)今自己
批判を含めて「家庭科の男女共修をすす
める会」に関わつてゆきたいと思ひます。
一人で、どのように運動と化してい
たらよいかなんて、ウジウジ考えていま
した貴会を知り、ホット(?)しまし
た。

会合等、どうぞ御連絡下さい。

(Tさん)

「教育のなかの性差別」を語る
新日本文学主催、女性解放
ゼミナールで

十月五日から、十二月二日まで、新日本文学主催の女性解放ゼミナールが、東中野の新日文の事務所で開催されている。女性解放運動を、部落、労働、教育、文明、政治等さまざまな角度からさぐるという試みである。十月十九日の第三回目が「教育のなかの性差別」というテーマで、会からは、嶋田、中嶋が出席し、家庭科の問題を中心として一時間程話をし、三十人近くの参加者と一緒に、この問題について語った。

前半は、嶋田が、明治からの教育政策の中で、女子教育がいかに国家目標のために利用されてきたか、年代を追いながら話し、後半は、中嶋が、教科書の中にあらわれた男女差別の実態、学校社会での女教師の位置、家庭科の女子必修の現実、及び男女共修運動について紹介をした。

参加者はほとんど二〇代の若い女性であったが、三名程、男性の参加もみられた。

東京都の学校で家庭科の教師をしている一人は、家庭科の話は耳に痛く感じたが、と前

日誌メモ

- 置きし、「大学では被服の中で、化学繊維のそのまた一部しかやらず、ブラウスとスカートを一枚ずつしか縫ったことがなく、生徒に教えるために洋服学校に通った。しかし、どうも生徒の作ったものがあまりよくない。自分の教え方が悪かったようだ。しかし、被服などは製作ばかりでなく、どう教えたらよいのであるかと迷う。住居の問題に入る時、ワンルームなどのある大きな家のスライドを写したら、一体誰がそんな家に住めるのかと生徒から反響をうけた。東京都でも男女共修の家庭科には異論はない」と語った。また、今年高校を出たばかりの若い人は、「自分の学校は進学校であり、九九が進学者で、自分は進学しない方に入っていたため、その差別を強く感じ、家庭科は、内職、息抜きの教科であった」と述べ、またある人は、「今の学校教育は、ただ知識のつめこみで、考えることや、自己表現には重きをおいていない、こういうことを実際にとりくんでいるか」と質問した。男子の参加者からは、「保育における男女の特性」について質問が出され、保育所はほとんど、保育さんしかいないが、保育さんは必要なのか、また年輩の男性からは、母乳で育てることの意義が主張された。
- ☆7・20 「婦人問題研究」なぜ家庭科の男女共修をすすめるか 梶谷典子
- ☆7・21 「東京タイムズ」家庭科を男女共修に「すすめる会」発足して半年」
- ☆8・10/11 日本母親大会ピラマキ、著名・カンバ集め
- ☆8・12 「毎日新聞」男の子にと始末のしつつけを 樋口恵子
- ☆8・24/25 全国PTA問題研究会第三回大会でアビール、ピラマキ、著名・カンバ集め
- ☆8・10 「創思」家庭科の男女共修について 佐藤慶子
- ☆9・6 教課審委員―渡辺茂東大教授訪問
- ☆9・10 「全国婦人新聞」教育の機会均等男女平等をめざして
- ☆9・19 教課審委員―原田穂西戸山中学学校長訪問
- ☆9・28 第三回討論集会「男女の特性をめぐって」PM1時30分～PM4時30分 於婦選会館
- ☆10・ 「新日本文学」男も学ぶ「家庭科」に嶋田道子